イギリスとギリシア及びクレタ島をめぐる戦い 1941年

デヴィッド・ホーナー

第2次世界大戦におけるイギリス軍の戦略について、拭えない疑問のひとつは、1941年2月のギリシャ防衛のために部隊を派遣するというイギリス政府の決定である。イギリス連邦は当時、アドルフ・ヒトラー総統率いるドイツ軍と単独で交戦していた。ヨーロッパは枢軸国（ドイツ、イタリア、ハンガリー、ルーマニア）に支配されており、ドイツはソビエト連邦との間に不可侵条約を締結していた。そしてスペインはドイツ寄りになっているようだった。実はこの時、「英国における戦い」（Battle of Britain）は終結していたのかもしれない。しかし、ドイツ軍の爆撃機は依然として毎晩、イギリスの都市や町を攻撃し続けていた。さらに海上では、ドイツ軍の潜水艦が優位に立ち始めていた。成功を暗示する唯一の兆しは、イギリス連邦軍が進攻していたイタリア領リビアがある北アフリカにあった。この時期のイギリスは到底、ヨーロッパの対岸で枢軸国に立ち向かい、海を越えての補給を必要とするような新たな作戦を発動する状況にはなかったと思われる。

ドイツ軍の侵攻に抵抗するギリシャを防衛する1941年4月のイギリスの作戦は、すぐさま失敗に終わった。イギリス連邦軍の約1万5,000人が死傷または捕虜になった。ギリシャを防衛する決断は、一見して愚かなものに思われた。一方、同様に議論を呼んだのは、1941年5月にドイツ軍の攻撃を受けたクレタ島を防衛する作戦だったが、この作戦もまたイギリスの敗北に終わっている。

これらの作戦に関する決定については、その後も多くの議論が続けられてきた。イギリスのウィンストン・チャーチル元首相はその記念碑的な全6巻の回顧録の中で、考え得る最善の表現方法で、当時の政府の決断に関する説明を試みている。また、イギリス陸軍の中東派遣軍最高司令官だったアーチボルド・ウェーベル大将、陸軍参謀総長のジョン・デイル大将、アンソニー・イーデン外相など主要関係者らは、これらの作戦への責任を負わされることに抵抗した。一方、戦闘部隊に最も多くの兵士を派遣したオーストラリアでは、歴史学者らがこれらの作戦について、幾分異なる見解を示している。中にはチャーチル元首相とイギリス政府を非難する声もあった。作戦成功の可能性について、オーストラリアの首相と軍事顧問らを欺いたというのである。そこで、この短い論文ではいくつかの重要な問題に絞り、それらに焦点を当てることとしたい。

ギリシャ防衛のための派兵は、1938年9月30日に端を発している。この時イギリスの

ネヴィル・チェンバレン首相とフランスのエドゥアール・ダラディエ首相がミュンヘンで、ドイツがチェコスロバキアのズデーテン地方を併合することについて、ドイツのヒトラー総統、イタリアのベニート・ムッソリーニ首相と共に合意書に署名した。合意にあたってのイギリスとフランス側の条件は、ドイツがそれ以上の領土拡大を図らないと約束することだった。しかし、ヒトラー総統は 1939 年 3 月 16 日にチェコスロバキアのその他の地域も占領し、イギリスとフランスの宥和政策が掲げた崇高な理想は、すぐに打ち砕かれた。そしてイギリスは同年 3 月 31 日、ドイツ軍の攻撃からの防衛をポーランドに約束した。その 1 週間後の 4 月 7 日、イタリアがアルバニアへの攻撃を開始し、宥和政策から封じ込め政策へと転じたイギリスとフランスは、ドイツがポーランドカルーマニアに侵攻するとの情報に警戒した。両国には貴重な油田があったからだ。そしてイギリスとフランスは 4 月 13 日、ギリシャとルーマニアを他国の攻撃から守ることで合意した。外交史家のエリザベス・バーガーはこの点から、「バルカン半島におけるこうした約束は、真剣に取り組まれた政治的あるいは軍事的な計画の結果ではない……ギリシャを守るとの約束は、イタリアのアルバニア侵攻に対するパニック的反応だ」との見解を示している¹。

ギリシャを守るという同国への約束は、およそ 1 年半後にイギリスを痛い目に遭わせた。当時、第 2 次世界大戦はすでに始まっており、ドイツはポーランドとデンマーク、ノルウェー、北海沿岸の低地諸国とフランスを占領していた。そしてイタリアは、その「戦利品の分け前」にあずかっていた。1940 年 10 月になると、アルバニアに駐留していたイタリア軍がギリシャに侵攻した。

イギリスは 1939 年の約束から、自国にはギリシャを支援する義務があると考えた。しかし、ギリシャのイオアニス・メタクサス首相はイギリス軍の地上部隊ではなく、武器や装備の供給による支援を要請した。そして、イギリスは提供し得るものを提供し、王立空軍の 3 個飛行中隊を派遣することにも合意した。また、クレタ島のスダ湾への派兵にも合意した。これによりギリシャはクレタ島に駐留させていた兵をギリシャ本土に戻し、任務にあたらせることが可能になったのである。

しかし、この支援は 1939 年の約束に基づくだけのものではなかった。地中海は当時、イギリスにとっての主要な戦域になりつつあった。エジプトに駐留していた同国軍は、リビアに駐留していたイタリア軍と交戦しており、枢軸国がギリシャを支配すれば地中海東部におけるイギリスの立場を脅かすと考えていた。この時点では、ギリシャはイタリアの侵攻を防ぐことに成功していた。そしてギリシャが最後まで絶対にイタリアに屈することがないよう支

¹ Elisabeth Barker, *British Policy in South-East Europe in the Second World War*, Macmillan, London, 1976, pp. 3, 4.

援することは、イギリスにとっての戦略上の利益だった。ギリシャ王国の王がイギリス国王といとこ同士であったことが情動的に、この決定に影響したとも指摘されている。

一方、ギリシャはイタリアの侵攻に反撃し、戦況はイタリアの劣勢となっていた。イギリスはクレタ島にも軍を派遣したほか、ルーマニアの油田に対する空爆を計画していた。ヒトラー総統はその爆撃がもたらし得る脅威とギリシャでのイタリア軍敗退の可能性を受け、イタリアのギリシャ侵攻を支援する必要があるとの判断に至った。そうすることで、最終的にもくろんでいたロシア侵攻に向け、地中海南部を掌握しておくことにつながると考えたのだ。だが、ドイツ軍はそのためには、ルーマニアとブルガリアを経由する形で移動する必要があった。1940年10月8日、ドイツ軍の部隊がルーマニアに入った。クーデターで前政権を倒した後の1940年11月、ルーマニアの新政府はドイツとイタリアが率いる枢軸国に加入していたのである。ドイツはさらに、ギリシャ侵攻に備えて部隊を移動させるため、ブルガリアに対しても、自軍の通過を認めるよう求めた。

イギリス情報当局はこの計画とドイツ軍の移動に関する情報を入手した。1940年12月13日、ドイツ国防軍最高司令部はギリシャ侵攻作戦、マリータ作戦を発動したが、イギリス軍の専門チームは同月27日、ドイツ軍の暗号解読に成功していた²。

政治的観点から、チャーチル首相とその顧問たちは、ギリシャを防衛するための派兵に向けて可能な限りのことをすべきだと考えていた。このため、エジプトとパレスチナに駐留させていたイギリス軍をギリシャに移動させる必要があった。しかし、この戦域ではイギリスの中東派遣軍最高司令官、ウェーベル大将がすでにリビアで対イタリア戦を指揮しており、新たな作戦のために部隊を移動させることには消極的だった。1941年1月14日にギリシャ・アテネで行われた同国のメタクサス首相と軍最高司令官アレクサンドロス・パパゴス大将、ウェーベル、中東地域のイギリス空軍司令官、アーサー・ロングモア空軍大将の協議において、イギリス側は小規模の兵力を派遣し3か月以内に2-3個師団に増強することを提案した。しかし、メタクサス首相はより大規模な支援を要請し、イギリスの提案はドイツにギリシャ侵攻の口実を与える可能性があるとして、これを拒否した。

チャーチル首相はその後も、アンソニー・イーデン外相とディル陸軍参謀総長をトルコとギリシャに送り、対枢軸国の共同戦線を張るべきだと呼びかけ続けた。その後、首相と参謀本部はリビア侵攻を断念し、ギリシャ支援のために部隊を派遣することを決断した。

1941年2月1日、チャーチル首相はウェーベル中東派遣軍最高司令官に対し、ギリシャにイギリス軍の派遣を認めるよう説得することを指示した。チャーチル首相は「ギリシャ側と何らかの合意に基づき、現実的な軍事計画を実行することが不可能になったとしても、我々

² F. H. Hinsley, *British Intelligence in the Second World War*, Volume One, HMSO, London, 1979, p. 352.

はできる限りの努力を払い、何としてもイギリス空軍の基地として利用可能なクレタ島かギリシャの島のいずれかを維持しなければならないのだ³」と書いている。

一方、メタクサス首相が死亡し、ギリシャ国王は後継の首相を任命した。2月23日、イーデン外相とディル陸軍参謀総長、ウェーベル中東派遣軍最高司令官はギリシャ首脳陣とアテネで会談し、イギリスの派遣軍を受け入れるよう説得した。イギリスの戦時内閣はその翌日に、この作戦を承認した。会談に同席していたオーストラリアのロバート・メンジーズ首相も、派兵に合意した。

この段階においてはイギリスの派遣軍は、中東に駐留していたオーストラリア軍の第6師団、第7師団からなる第1軍団と、ニュージーランドの1個師団、イギリス軍の1個機甲旅団、ポーランド軍の1個旅団から構成される計画だった。そして、オーストラリア軍が最も多くの兵力を提供することから、この作戦は同国政府の承認を得る必要があった。

オーストラリアのメンジーズ首相は2月初旬、中東に派遣していた同国の兵士らの元を訪問していた。そしてロンドンに向かう直前の13日、ウェーベル中東派遣軍最高司令官からギリシャ派兵に関する計画を伝えられた。さらにウェーベル司令官はその5日後、オーストラリア軍の司令官、トーマス・ブレイミー中将に対し、ギリシャにおける作戦の計画についてメンジーズ首相と協議したと伝えた。ブレイミー司令官は作戦の見通しに否定的だったが、メンジーズ首相が受け入れたものと考え、オーストラリア政府に作戦参加への反対意見を訴えることは控えた。一方、ロンドンにいたメンジーズ首相は、ブレイミー司令官が作戦に疑いを持っているとは知らず、ブレイミー司令官が作戦の計画段階で相談を受けていたものと考えていた。そして作戦の詳細に関する情報を提供されないまま、作戦に疑問を持ちながらも首相はオーストラリア軍の派遣に同意をした⁴。

結局のところ、ブレイミー司令官はオーストラリア政府に電報を打ち、作戦に関する深い懸念を伝えた。しかし、その時にはすでに決定が下されていた。厳しい見方をすれば、イギリスはこの作戦の危険性について、オーストラリアにすべてを説明してはいなかった。しかし、オーストラリアの指導部にも落ち度があった。ブレイミー司令官は速やかに、自国政府とメンジーズ首相の双方に自身の懸念を伝えるべきだったのだ。そしてメンジーズ首相は決断を下す前に、ブレイミー司令官の意見を求めるべきだった。この一件は、連合作戦において戦争の戦略的方向性に関してほとんど発言権を持たない、力の小さいパートナー国が直面する問題点を浮き彫りにした。

³ Winston S. Churchill, *The Second World War, Volume III The Grand Alliance*, Cassell, London, 1950, p. 59.

⁴ 一連の協議の内容については、David Horner, *Defence Supremo: Sir Frederick Shedden and the Making of Australian Defence Policy*, Allen & Unwin, Sydney, 2000, pp. 101-104, および David Horner, *Blamey: The Commander-in-Chief*, Allen & Unwin, Sydney, 1998, pp. 168-176 に詳述。

作戦成功の可能性は、見る間もなく縮小していった。3月1日には、ブルガリアが日独伊三国同盟条約に加入し、ドイツ軍がブルガリア国内の前線をギリシャに向け進軍しているとのニュースが伝えられた。一方、トルコに連合国側につくよう説得するイギリスのイーデン外相の試みは難航していた。さらにイタリア軍防衛のため、ドイツ軍の機械化部隊がリビアに到着する一方で、ギリシャ軍のパパゴス最高司令官が立案した同国内でのイギリス軍の行動計画については、イギリス軍がギリシャに着いた直後から反対意見が出ていた。

そこでチャーチル首相は、イーデン外相とデイル陸軍参謀総長、さらにカイロにいたウェーベル中東派遣軍最高司令官に対し、作戦成功の可能性に関する意見を求めた⁵。首相はこの時イーデン外相に対して、ギリシャ側は作戦に関する詳細やその実行の根拠についてほとんど首相に伝えておらず、イギリスからオーストラリアおよびニュージーランド政府に提示し得る作戦参加の根拠は、「高貴なるものは義務を負うというノブレス・オブリージュの精神以外、これを正当化するいかなるものもないこと、適切な軍事的判断が不可欠であること」を伝えた。

その後、デイル陸軍参謀総長は首相に対し、オーストラリアのブレイミー司令官とニュージーランドの司令官であるバーナード・フレイバーク少将は、作戦への協力に前向きであると報告した。首相は3月7日に開かれた戦時内閣の閣僚会議で、作戦を実行すべきと判断したことを宣言し、メンジーズ首相もこれに同意した。しかし、メンジーズ首相は後に自国の閣僚らに対し、自身が抱えていた懸念についてチャーチル首相が、次のように答えたことを伝えている。

約束したからこの作戦に協力するというわけではない。約束以外に協力する理由がないのであれば、我々にはこの作戦を回避する用意があったはずだ。作戦実行の真の根拠は、ギリシャに関して我が軍事顧問らが下した判断、それにも増して、ギリシャを見捨てることによって生じる道徳的、政治的な反響だ⁶。

チャーチル首相が念頭に置いていた政治的な反響のひとつは恐らく、アメリカへの影響である。首相は1940年11月以降、イギリスが国外の領地をアメリカ軍基地の用地として貸与する代わりに、アメリカから駆逐艦やその他の装備を借り受ける武器貸与協定について協議していた。イギリスの戦略家の一部は、ギリシャに援軍を派遣できないことよりも、

⁵ チャーチル首相がギリシャへの派兵を決断した経緯に関する詳細については、Sheila Lawlor, *Churchill and the politics of war, 1940-1941*, Cambridge University Press, Cambridge, 1994 を参照。

⁶ メンジーズ首相からファデン氏宛ての電報 M27, 14 March 1941, National Archives of Australia (NAA): 290/9 bundle 1 (13).

同国で敗退することの方がイギリスの名声を一層深く傷付けることになると考えていた。他方、貸与協定は何が起ころうとも、アメリカ議会の承認を得るだろうと考える者たちもいた。ただ、チャーチル首相にとってはそれでもなお、この武器貸与協定の実現の方が重要な問題だった。アメリカの武器貸与法案は 1941 年 2 月 9 日に議会下院を通過し、約 1 か月後には上院も同法を可決している。チャーチル首相はアメリカの意向に敏感だった。3 月 10 日にアメリカのルーズベルト大統領にギリシャを防衛する決定を伝えている。そして大統領が武器貸与法案に署名、同法を成立させたのは、その翌日だった。

同時期に起きた重大な出来事は、3 月 26 日にユーゴスラビアで発生したクーデターである。同国政府が三国同盟条約に参加する決断を不服とした者たちが起こしたもので、これにより発足した新政権は、ドイツとイタリアに激しく抵抗した。これを受け、ヒトラー総統にはユーゴスラビアをも攻撃する必要があるが生じた。一方でこのクーデターは、新たな同盟国を獲得できるかもしれないと考えたイギリスとギリシャの士気を高めた。チャーチル首相はこの時、オーストラリア政府に次のような電報を打っている。

約 1 か月前に我々がギリシャへの派兵を決断したとき、これは「ノブレス・オブリージュの精神」に基づくものであり、軍事行動としてはどちらかといえば、見通しの暗いものに思えた。しかし、木曜日にベオグラードで起きた出来事は、我々が実行しようとしているギリシャでの作戦と、これまでにバルカン情勢全般に対して我々が取ってきたその他の行動がもたらし得る、計り知れない影響を示している⁷。

言い換えれば、ユーゴスラビアでのクーデターがもたらした根拠のない楽観主義よりも以前に、ギリシャでの作戦は「ノブレス・オブリージュの精神」によって決定していた。つまり、イギリスはそれ以前にも、強大な侵攻国に立ち向かう小国のために立ち上がる大国としての道義心と責任感によって、行動してきたということだ。

ここで、この作戦の軍事的な側面のいくつかについて考察する。イギリスの課題はいくつかの点で、遠方にある離島の領土防衛に似ている。イギリス軍の兵士と装備はすべて、ギリシャまで海路で輸送する必要があり、そしてギリシャの補給支援が限定的なので、現地に到着したイギリス軍には本国からの支援が必要となる。派遣部隊はエジプトのアレクサンドリアに駐留していたアンドリュー・カニングム司令官が率いるイギリス海軍の地中海艦隊が輸送し、また補給艦の護衛にも同艦隊があたった。イギリスがこの任務の重要性を認識

⁷ チャーチル首相からオーストラリア政府宛ての 1941 年 3 月 30 日付の電報 (UK National Archives (TNA): PREM 3 63/13.176).

したのは、イギリスの艦隊がイタリア海軍の戦隊と衝突したマタパン岬沖海戦中の 3 月 28 日のことだった。イタリア軍は、ギリシャに向かっていたイギリスの艦隊を迎撃しようと試みたものの、イタリアの巡洋艦 3 隻と駆逐艦 2 隻が沈没し、戦艦 1 隻が損傷を受けた。

「W 集団」として知られるイギリス軍の部隊は、ヘンリー・メイトランド・ウイルソン中將が司令官として指揮していた。前述のとおり、この部隊はオーストラリア軍の第 1 軍団（第 6 師団および第 7 師団）、ニュージーランドの 1 個師団、イギリスの 1 個機甲旅団、ポーランドの独立旅団により組織されていた。また、航空機 80 機ほどからなるジョン・ダルビアック少将率いるイギリス空軍の小規模な部隊も、これに参加した。

問題は、海上輸送力の不足によってこれらの兵力が分断され、段階的にギリシャに投入されたことだった。ドイツ軍が 4 月 6 日にギリシャへの攻撃を開始したときには、派遣される予定だった「ラスター兵団」のうち、ニュージーランドの 1 個師団とオーストラリア第 1 軍団第 6 師団中の 2 個旅団、イギリス軍の第 1 機甲旅団が到着してただけで、オーストラリア軍の第 6 師団第 3 旅団は、まだアレクサンドリアを出発さえしていなかった。さらにブレイミー司令官には 4 月 5 日、オーストラリアの第 7 師団が作戦に参加できなくなったことが伝えられた。ドイツ軍のエルヴィン・ロンメル元帥率いる「アフリカ軍団」によるリビアへの攻撃を受け、イギリスのウェーベル中東派遣軍最高司令官はオーストラリア軍の第 7 師団とポーランドの旅団を、北アフリカに残すことを決めたためだった。

ギリシャ軍の大半は、同国北西部でイタリア軍と交戦していた。オリンポスの前線はウイルソン大將（当時）が司令官として指揮することが決まっていた。オリンポス山はエーゲ海からギリシャ北西部のユーゴスラビアとの国境に向けて走り、ウイルソン司令官にはブルガリアとユーゴスラビアの南部から国境を越え、ドイツ軍がギリシャの北東部への侵攻を阻止することが指示されていた。ウイルソン司令官が指揮する W 集団には、ギリシャの東部マケドニア軍（定員割れの 3 師団のみ）とイギリス連邦軍の部隊が含まれていた。ニュージーランドの師団はオーストラリア第 1 軍団に統合され、この部隊の名称は「オーストラリア・ニュージーランド（アンザック）軍団」に変更された⁸。ニュージーランドの師団はオリンポス山近くの海岸に沿った右翼に、オーストラリアの第 6 師団は左翼に布陣した。ただし、この師団は 2 個旅団のみで構成されており、ドイツ軍がユーゴスラビアから攻撃してくれば、この防衛線が突破されることは明らかだった。

ドイツは 2 つの部隊による攻撃を開始した。ユーゴスラビア中部と北部に進軍していた第 2 機甲師団と、ギリシャへの侵攻に向けてユーゴスラビア南部を通過してきた第 12 軍である。

⁸ オーストラリア側の見解については、Gavin Long, *Greece, Crete and Syria*, Australian War Memorial, Canberra, 1953 を参照。

第 12 軍は、2 個機甲師団を含む 3 軍団と 4 個歩兵師団、2 個山岳師団から成り、さらに予備として 2 個歩兵師団も配備されていた。

ドイツが攻撃を開始した 4 月 6 日、ブルガリアとの国境に沿ったギリシャ東部の防衛陣地において、ギリシャ軍はドイツ軍の攻撃に耐え、健闘した。しかし、ユーゴスラビア側からの攻撃にはほとんど抵抗することができず、ドイツ軍は 4 月 9 日、テッサロニキにまで進軍した。

ギリシャにとっての最大の脅威は、ドイツ軍がユーゴスラビアからモナステール峡谷を通過して侵攻してくることだった。この峡谷からギリシャ国内に攻め入られれば、イギリス軍の防衛線が崩壊する。ウィルソン司令官は、オーストラリア軍第 6 師団のアイバン・マッカイ少将の指揮下にあった兵を集めて迅速に部隊を組織し、この地域の維持にあたらせた。この部隊は、オリンポス山の防衛線から移動させたイギリス軍の第 1 機甲旅団、オーストラリア軍の第 19 旅団で組織されていた。ドイツ軍は 4 月 11 日から 12 日にかけて、この「マッカイ兵団（訳注：イギリス連邦、ギリシャ混成部隊）」への攻撃を実施して防衛線を突破し、マッカイ兵団は撤退を余儀なくされた。一方、プレーミー司令官は、アンザック軍のその他の部隊をアリアクモン川の防衛線まで撤退させた。

ドイツ軍はエーゲ海に近いオリンポス山の周辺で攻撃を開始した。そして 4 月 18 日には、アンザック軍が防衛線を突破した。ギリシャ旅団撤退の知らせを受けたウィルソン司令官は、全部隊に対して撤退を指示した。オーストラリア軍団第 6 師団の 3 個目の旅団がエジプトから到着したのは、この頃だった。

アンザック軍は 4 月 19 日、何とか混乱なくテルモピュライまで撤退した。一方、沿海部の平地には依然としてニュージーランド軍の部隊がおり、その左翼にあたる山岳地帯には、オーストラリア軍の兵士が防衛線を維持していた。

イギリス陸軍のウェーベル中東派遣軍最高司令官もこの時まで、部隊に撤退を指示していた。前線にいたオーストラリア軍とニュージーランド軍の部隊は、南部の沿海部にいたその他の部隊が海岸線から撤退するまでの間、その場にとどまって防衛にあたった。ドイツ軍は 4 月 24 日にも攻撃を行ったが、アンザック部隊は他の部隊の撤退が完了するまで、24 時間にわたってこれを持ちこたえた。この時点までにギリシャ国内に配備されたイギリス連邦軍の兵士の数は、およそ 6 万 2,000 人に上っていた。

カニンガム司令官はイギリス軍を撤退させるため、巡洋艦 6 隻と駆逐艦 24 隻、複数の護衛艦、揚陸艦 2 隻、軍用輸送船 14 隻、多数の上陸用舟艇を集めた。4 月 29 日までに、海軍は約 5 万人のイギリス兵を撤退させた。イギリスの艦船のうち、航空機による攻撃で沈没したのはわずか 4 隻の輸送船と 2 隻の駆逐艦だった。また、沈没によって死亡した兵士はおよそ 500 人だった。ギリシャに残されたのは、基地に駐留する兵士とキプロス島やパ

レスチナ人の労務者、合わせて約1万4,000人だった。そしてアンザック軍の兵士およそ3,600人は、ドイツ軍の捕虜となった。

イギリスの派兵規模は、ギリシャを防衛するにはまったく不十分だった。ギリシャ軍の最高司令部に決断力がないことは明らかで、同国軍には近代戦を行うだけの十分な装備も、補給能力もなかった。さらに、適切に組織化されたイギリス軍とギリシャ軍双方の指揮官による合同の司令部も存在していなかった。これに対し、ドイツ軍は規模で優り、より数多くの戦車やより強力な空軍を保有していた。アンザック軍は全体としては善戦したが、力の差が歴然とした相手との戦いに狼狽する部隊もあった。

一方、ギリシャの戦いについてはいくつかの通説が残されている。まず、アンザック軍はドイツ軍の機甲師団に圧倒的な敗北を喫したというものだ。しかし、最近の研究によれば、戦闘の大半において、アンザック軍はドイツ軍機甲師団の前衛部隊としか戦っていなかったことが分かっている。アンザック軍はドイツ軍が前線に戦車を投入するよりも前に、撤退していたのである⁹。ドイツの前進は、交通破壊や悪路のほか、イギリス軍の砲撃によっても阻まれていた。

もうひとつの説は、アンザック軍が撤退を強いられるにあたってはドイツ空軍の存在が決定的な要因となったというものだ。だが実際には多くの場合においてドイツの戦闘機は悪天候と不適切な戦術のため、アンザック軍の撤退にほとんど影響を及ぼさなかった¹⁰。アンザック軍の撤退の主な理由は、ギリシャ軍陣地が崩れればドイツ軍に包囲される可能性があることを懸念したからだった。ただし、ギリシャ軍部隊の大半はイギリス軍が撤退するまで持ちこたえた。より正確に言えば、W 集団は計画的な撤退を行ったのである。そしていずれの防衛作戦においても、W 集団は本格的な戦闘になる前に、撤退を完了していた。

イギリスがギリシャの防衛に乗り出すべきだったのか否かという点については、長年にわたって議論がなされてきた。部隊をギリシャに向かわせた時、ウェーベル中東派遣軍最高司令官はリビアでの攻撃を縮小せざるを得なかった。そのため、ドイツ軍のロンメル元帥率いるアフリカ軍団の反攻に対して十分な準備をすることができず、リビアに駐留していたイギリス軍は、エジプトとの国境付近にまで退却せざるを得なくなった。歴史家のロビン・ハイアムは、ウェーベル中東派遣軍最高司令官はイギリス軍情報部が予測していた通りドイツ軍が3月6日に攻撃を開始した場合、その時までギリシャに到着している一部の部隊を迅速に撤退させることができるよう、配下の部隊を段階的にギリシャに移動させる計画だっ

⁹ Craig Stockings, 'The Fairy Tale of the Panzers in Greece, April 1941,' *Australian Defence Force Journal*, no 185, 2012.

¹⁰ Craig Stockings and Eleanor Hancock, 'Reconsidering the Luftwaffe in Greece, 1941,' *The Journal of Military History*, vol 76, no 3, July 2012.

たのではないかと推測している。しかし、バルカン半島南部で続いた悪天候のため、ドイツ軍の攻撃は4月6日にまでずれ込み、その時にはすでにイギリス軍の規模は迅速に撤退するには大きすぎ、戦いの結果を変えるには小さすぎる規模になっていたのである¹¹。

また、ある研究者は、イギリス軍司令部は「機械化された戦争」を理解していなかったのではないかと主張している。ドイツ軍の戦車による侵攻はギリシャの地形によって妨げられ、そのためイギリス軍がギリシャで勝利を収める可能性はあると誤解していたというのだ¹²。しかし、W集団が展開された過程を見ると、イギリス軍司令部が常に、撤退の可能性を念頭に置いていたということがわかる。

ギリシャの戦いに関しては、2013年に出版されたストックingsおよびハンコック共著の『アクロポリスの鉤十字』*Swastika over the Acropolis* に最も説得力のある説明がなされている¹³。イギリスのギリシャ防衛には非常に確固たる政治的根拠があったという。作戦開始後の4月18日、チャーチル首相がギリシャ防衛の理由について、ドイツの侵攻を妨げるためではなく、「イギリス軍は過去も現在も、ギリシャで果たすべきひとつの役割を担っている。それは可能な限り長期間にわたり、可能な限り最大の支援を提供することだ」と説明したことを指摘している¹⁴。そして両氏は、次のように結論付けている。「軍事的にはあらゆる困難があったが、ギリシャへのW集団の派遣は本質的には成功を収めた。W集団の派遣は、比較的小さいコストで政治的配当を得られる、政治的なジェスチャーだったのである」¹⁵。

イギリスのギリシャ防衛を擁護する人たちは、これによってドイツはギリシャ侵攻を余儀なくされ、結果としてドイツのロシア侵攻が1941年6月22日にまで遅らされたと主張する。このことが、ドイツ軍が同年、ロシア攻略に失敗する原因になったというのだ¹⁶。しかし、マーチン・ファン・クレフェルトをはじめとする学者たちのその後の研究では、ドイツ軍のロシア侵攻が遅れた理由は別にあると指摘されている。イギリス軍などによるギリシャでの作戦は、「バルバロッサ作戦」開始の日程に何ら影響を及ぼさなかったというのだ¹⁷。だが、この主張は事実とはまったく異なっている。ヒトラー総統にギリシャ侵攻を決意させた背景にはその

¹¹ Robin Higham, *Diary of a Disaster: British Aid to Greece, 1940-1941*, University Press of Kentucky, Lexington, 1986, p. 236.

¹² Peter Ewer, 'The British Campaign in Greece 1941: Assumptions about the Operational Art and Their Influence on Strategy,' *The Journal of Military History*, vol 76, no 3, July 2012.

¹³ Craig Stockings and Eleanor Hancock, *Swastika over the Acropolis: Re-interpreting the Nazi Invasion of Greece in World War II*, Brill, Leiden, 2013.

¹⁴ 同上、546 頁から引用。

¹⁵ 同上、543 頁から引用。

¹⁶ Viscount Cunningham of Hyndhope, *A Sailor's Odyssey*, Hutchinson, London, 1951, p. 392 などを参照。

¹⁷ Martin van Creveld, *Hitler's Strategy 1940-41—The Balkan Clue*, Cambridge university press, Cambridge, 1973.

大きな要因として、ギリシャを防衛するというイギリスの決断があった。また、ヒトラー総統は 1941 年 4 月 6 日、ドイツ軍がギリシアへの侵攻を開始したその日に、バルバロッサ作戦の開始を 6 月 22 日と決定している。つまり、ストックingsとハンコックが結論付けているとおり、「『マリータ作戦』は唯一の理由ではないものの、『バルバロッサ』の開始を 1941 年 6 月まで遅らせた主要な原因になったと結論付けざるを得ない」¹⁸ ののである。ただしイギリスの戦略上の目的は、ドイツのロシア侵攻を遅らせることではなかった。また、ドイツが 1941 年末にモスクワ陥落に失敗したのは、作戦開始の日程が遅れたこととは別の理由によるものだった¹⁹。

チャーチル首相は、ギリシャ防衛の決断に対する批判に対して常に敏感だった。イギリスは 1941 年 11 月、ドイツがコーカサス地方を制圧した場合、トルコに部隊を派遣する可能性について検討していた。ブレーミー將軍の意見に基づき、オーストラリア政府はイギリス政府に対し、ギリシャとクレタ島における作戦の欠陥を伝え、その後のトルコでの軍事作戦においては同様の問題が発生しないよう確約することを求めていた。チャーチル首相は、この批判に激しい苛立ちをみせた。そしてディル陸軍参謀総長は首相に対し、「我々がギリシャを防衛することがいかに正当であるか、オーストラリア側が理解することが重要だ」と助言した²⁰。

イギリスの軍事史家シビル・フォールズは 1948 年、「全体としては政治上、戦略上の軽率さが招いた惨めなエピソードである」と論評した。チャーチル首相はギリシャに関する決断について、「賢明であったかもしれないし、そうではなかったかもしれない。しかしながら決断に至る過程は、「軽率」などではなく、苦痛に満ちたものだった」と書き、批判に対し応答している²¹。

ギリシャの戦いのすぐ後には、クレタ島を防衛するための戦いが始まった。前述のとおり、イギリスは 1940 年 11 月、ギリシャ本土で戦う同国軍防衛のため、クレタ島北部のスタ湾に部隊を派遣した。イギリスはスタ湾に海軍の前進基地の設営を考えていた。しかし、任命されたイギリス軍の司令官たちはこの島の防衛線を張ることも、予想されるドイツからの攻撃に備えることもできなかった。

ギリシャから撤退したイギリス連邦軍の兵士たちの多くはクレタ島に配備された。一部は

¹⁸ Stockings and Hancock, *Swastika over the Acropolis*, p. 581.

¹⁹ 同上、第 20 章に詳述。

²⁰ David Horner, *High Command, Australia and Allied Strategy, 1939-1945*, George Allen & Unwin, Sydney 1982, p. 126.

²¹ David Reynolds, *In Command of History, Churchill Fighting and Writing the Second World War*, Allen Lane, London, 2004, pp. 233-4.

すぐに中東に派遣されたが、そのまま島に駐留した部隊もあった。重機や重火器はすべてギリシャに残してきており、部隊の多くは分散し組織が乱れていた。

イギリスは、クレタ島を維持することが多大な利益になるとみていた。地中海艦隊の前線基地になるほか、イギリス空軍がルーマニアの油田を爆撃する場合、その基地にもなり得るからだ。一方、ドイツ軍にとってもクレタ島はこれと同じ理由で魅力的な標的だった。掌握できれば、イギリス軍によるこの島の利用を阻止できるだけでなく、エジプトとパレスチナを空襲する際に利用でき、枢軸国軍が地中海東部を支配することにもつながる。

だが、クレタ島の作戦は、攻守双方に難題を突き付けた。イギリスの地中海艦隊はイタリア艦隊に対して優勢を維持しており、ドイツ軍が海から島に侵攻するのは困難だった。ドイツ軍はいかなる作戦を立てようとも、ギリシャの漁船を徴用する必要があった。また、ドイツ軍がギリシャ南部に大規模な空軍部隊を移動させていた一方で、イギリス軍がクレタ島に派遣できる空軍部隊はほとんどなかった。そのためイギリス軍艦船によるクレタ島防衛や島への補給はドイツ空軍(ルフトヴァッフエ)により、非常に困難になると予想された。実際、ドイツ空軍は5月15日までに島を効果的に封鎖し、その後は小型高速船が夜間に物資を供給する以外、クレタ島に駐留するイギリス軍への補給はほぼ途絶えたのだった。

こうした困難と利益の双方に直面したドイツ軍は、大規模な空挺部隊を投入してクレタ島の占領作戦を計画した。オランダ北部やギリシャではすでに、小規模ながら空挺部隊を使っている作戦が実施されていた。ドイツ軍はまずクレタ島の飛行場を占拠し、その後グライダーや輸送機で多数の部隊を投入する計画を立てた。

クレタ島に駐留していたイギリス連邦軍は、数多くの問題に直面していた。5月第1週の時点で、島に派遣されていた部隊はおよそ1万5,000人のイギリス兵、約7,700人のニュージーランド兵、約6,500人のオーストラリア兵、そして約1万1,000人のギリシャ兵で構成されていた。しかし、ギリシャ兵の大半は実質的には訓練を受けておらず、武器も大幅に不足していた。

チャーチル首相の指示により、島に駐留する部隊の司令官にはニュージーランド軍のフレイバーク少将が任命された。少将はエドワード・プティック准将が率いる師団を直轄としたが、この師団は2個旅団を持つのみで、司令部も設置されていなかった。ただし、オーストラリア軍の第19旅団(5個歩兵大隊で構成)、イギリス軍の第14旅団もその指揮下に置かれた。さらにオーストラリア軍の砲を持たない砲兵連隊が小規模な歩兵大隊として特別に編制されるなどした。スタ湾周辺に展開する基地部隊は、イギリス海軍のエリック・ウェストン少将が指揮した。

クレタ島は細長く山岳の多い地形で通信手段が乏しい離島である。そのためフレイバーク司令官は、西のマレムからカネア、レティモ、イラクリオンと東に向かって、主要上陸地点

と飛行場に部隊を配置した。しかし部隊には、ひとつの場所から別の場所へと迅速に移動できる能力がほとんどなかった。

その一方で、フレイバーク司令官には極めて貴重な利点を与えられた。イギリス軍の暗号解読チームが、ドイツ軍が空挺部隊を使って飛行場を攻撃し、援軍が海上から上陸する計画であることを読み取ったのだ。これが、ドイツ軍のエニグマ暗号機を解読したことによって入手した、かの有名な「ウルトラ情報（訳注：イギリス軍が解読したドイツ軍エニグマ暗号解読器の解読情報）」である。

チャーチル首相は、この情報を非常に重要視して、ウェーベル中東派遣軍最高司令官とフレイバーク司令官に伝えるよう指示した。首相は4月28日、以下の電報をウェーベル司令官宛てに送った。

我々が入手した情報によると、ドイツ軍は間もなくクレタ島に対し、大規模な空挺部隊と爆撃機による空からの攻撃を実施する計画だとみられる。島における我が軍の状況と、現行の計画を報告せよ。ドイツの空挺部隊を壊滅させる絶好の機会となるはずだ。クレタ島は、断固として防衛しなくてはならない²²。

その他の情報によると、ドイツ軍はおよそ1万の兵を海から上陸させる計画だった。フレイバーク司令官にはウルトラ情報について知らされていたものの、その情報の信憑性について完全に信じていなかった可能性はある。また同司令官には、この情報を事前に得ていたことを示すような形で部隊を再配置してはならないとの指示が出されていた。いずれにしても、司令官は依然として主な脅威は空ではなく、海上にあると考えていたのだ。歴史学者のアントニー・ビーヴァーは、フレイバーク司令官はウルトラ情報に基づくサインを読み誤り、ドイツ軍は主に海からの上陸作戦によって攻撃してくると確信していたと結論付けている²³。

ドイツ軍の攻撃は5月20日、大規模な空襲によって始まった。その後、パラシュートやグライダーによる空挺作戦がマレムとカネア、レティモ、イラクリオンで展開された。ドイツ軍はレティモでオーストラリア軍の2個大隊から、イラクリオンでイギリス軍の旅団から撃退され、防御を余儀なくされた。一方、マレムで激しく応戦したニュージーランド軍は、ドイツ軍による飛行場占拠を阻止できなかった。攻撃開始から2日目の午後には、ドイツ軍山岳師団の第一陣を乗せた輸送機が到着した。

その夜、イギリス海軍はギリシャの大型漁船20隻からなる船団を迎撃した。漁船に乗っ

²² Churchill, *The Grand Alliance*, p. 241 から引用。

²³ Antony Beevor, *Crete: The Battle and the Resistance*, Westview press, Boulder, 1994, pp. 157-8.

ていたのはドイツ兵で、漁船の一部は沈没し、およそ 400 人の兵士が溺死した。翌朝には、イギリス海軍の巡洋艦 3 隻と駆逐艦 4 隻が別の船団と交戦した。イギリス軍艦船はドイツ軍の空襲で大きな損傷を受けたが、漁船に乗ったドイツ兵たちを撃退することに成功した。また、その日の午後にはイギリス海軍の別の戦隊が増援したことにより、海戦の規模は拡大した。巡洋艦 2 隻と駆逐艦 3 隻が攻撃を受けて沈没したものの、イギリス海軍は効果的にドイツ軍の海上からの侵攻を阻止した。

クレタ島のマレムで戦っていたニュージーランド軍は、ドイツ軍に効果的に反撃することができなかった。ドイツ軍は間もなくスタ湾侵攻を開始した。フレイバーク司令官は 5 月 26 日、島の防衛に失敗したことを認め、部隊に対し山を越えて南部海岸に向け撤退を開始するよう命じた。5 月 29 日夜からの翌々日の夜までに、島に残っていた兵士らはスファキアの浜辺から、イギリス軍の巡洋艦と駆逐艦によって撤退した。イラクリオンで戦っていたイギリス軍の部隊は、5 月 28 日の夜に撤退を開始した。しかしドイツ軍の空襲により駆逐艦 2 隻が沈没、その他の艦船も損傷を受けた。さらに、海上に投げ出された兵士たちは機関銃や爆弾による攻撃を受け、命を落とした。一方、レティモで勇敢に戦っていたオーストラリア軍の兵士たちを撤退させる計画は立てられていなかったため、その大半が捕虜となった。

甚大な損害を出したにもかかわらず、カニンガム提督は「海軍は陸軍を失望させてはならない」と決意し、「軍艦の建造にかかるのは 3 年だが、新たな伝統を築くには 300 年かかる。撤退作戦を継続する」と明言した²⁴。クレタ島の戦いにおいて、海軍は陸上で戦った陸軍よりも多い 2,000 人以上の兵士を失った。戦闘に投入された 54 隻のうち、無傷で残されたのは 20 隻だけだった。クレタ島周辺での戦闘では、巡洋艦 3 隻、駆逐艦 6 隻が失われた。さらに戦艦 2 隻、空母 1 隻、巡洋艦 2 隻と駆逐艦 2 隻が大破し、その後数か月間にわたって戦線から離脱することとなった。

クレタ島から撤退した兵士は、およそ 1 万 6,500 人に上った。イギリス軍は約 4,000 人の死傷者を出し、さらに 1 万 1,400 人がドイツ軍の捕虜になった。一方、ドイツ軍の空挺部隊にも多数の死者が出たことから、ヒトラー総統は以後この部隊を降下作戦に投入することを禁じた。

クレタ島の防衛において、イギリス軍は多くの過ちを犯した。初めに派遣された部隊は、防衛準備を整えることができなかった。島に配備されたのはギリシャから短期間に撤退してきた部隊だったため、適切に組織化されておらず、装備も不十分だった。フレイバーク司令官の作戦指揮も不適切だった。司令官はイギリス海軍が海からの上陸作戦を阻止してくれると信じて、配下の部隊の大部分を飛行場に集中させるべきだった。海軍は実際に、ドイ

²⁴ Churchill, *The Grand Alliance*, p. 265.

ツ軍の上陸を阻止したのである。また、ニュージーランド軍を中心に、一部の司令官たちには戦意も自主性も欠けていた。さらに、イギリス空軍は数で優るドイツ空軍に対して上空援護に失敗した。高い能力を有するイギリス軍の地中海艦隊も、制空権をドイツ軍に掌握されていたことから、クレタ島への補給と撤退作戦において苦戦を強いられた。クレタ島での敗戦後、その原因について調査が行われたが、戦時中には「ウルトラ」情報の存在を秘匿する必要があったため、順調には進まなかった²⁵。

空と海からの十分な援護がないまま地上部隊に離島の防衛を指示すれば、その部隊は人質になる可能性が高い。海軍の犠牲がなければ、イギリス軍はギリシャとクレタ島でより甚大な被害と損失を被っていただろう。ギリシャを守るというイギリスの決断は、政治的要請と軍事的現実を均衡させるために必要なものだった。ギリシャ作戦の開始時において、イギリスの軍事指導者たちは自陣営がドイツ軍の侵攻に抵抗し得るだけの十分な戦力を保有していないことを理解していた。だからこそ、政治的、軍事的にそれが適切だと考えられるようになるや否や、部隊を撤退させるよう計画したのである。クレタ島では、イギリス軍はより強い決意を固めてその防衛に臨んだ。しかしながら、イギリスの軍事力は不十分であり、イギリス軍およびイギリス連邦国軍の司令官たちとその部隊は、近代戦についてまだ学ぶべきことを数多く抱えていた。それが過酷な現実であった。

²⁵ Callum MacDonald, *The Lost Battle: Crete 1941*, Free Press, New York, 1993, p. 299.